

# 権利の偏重と国家介入（SoE）の病理：新朝および後漢末期における統治崩壊の比較制度分析

## 序論：帝国の崩壊を巡る二つの経済的・法制的視座

中国史上、漢王朝（前漢・後漢）の時代は、古代帝国としての統治機構が完成を見た時期であると同時に、そのシステムが内包する構造的な矛盾が顕在化した時代でもありました。特に、前漢と後漢の間に挟まれた王莽（おうもう）による新朝（8年 - 23年）の崩壊と、後漢末期（184年頃）の統治機能不全は、いずれも大規模な農民反乱——赤眉・緑林の乱、および黄巾の乱——によって決定づけられましたが、その発生メカニズムは制度的な観点から見て対照的な様相を呈しています。

本レポートは、これら二つの歴史的転換点を、現代的な政治経済学のフレームワークである「権利の偏重（Rights Bias/Privilege）」および「国家による経済介入（State-Owned Enterprises: SoE）」の観点から包括的に分析することを目的とします。王莽の時代における「過剰な国家介入」と、後漢末期における「国家機能の私物化・商品化」は、それぞれ異なる形で社会契約を破綻させ、民衆の生存権を脅かしました。

本分析では、単なる歴史的経緯の記述にとどまらず、ローマ史における「アゲル・プブリクス（公有地）」問題やプロレタリア（無産階級）の動向との比較も交えながら、権力の偏在と経済政策の失敗がいかにして「統治の正統性（Legitimacy）」を侵食し、不可逆的な社会変動（Rebellion）を引き起こすに至ったかを詳細に論じます。

---

## 第1部：新朝（王莽政権）における「過剰な国家介入」と権利の収奪

### 1.1 理想主義的専制と「周礼」への回帰

前漢末期、土地兼併の進行による貧富の格差拡大と、外戚による政治腐敗が深刻化する中で政権を掌握した王莽は、儒教の経典『周礼（しゅらい）』に基づく理想的な古代社会の復興を掲げました。彼は篡奪者（Usurper）として否定的に描かれることが多いですが、政策的には極めて急進的な「改革者」であり、その統治手法は現代言えば、強力な中央集権的計画経済、あるいは国家社会主義的なアプローチに酷似していました<sup>1</sup>。

王莽の政治哲学の根底にあったのは、「私的権利の制限」と「国家権益の最大化」による社会正義の実現でした。彼は、市場経済の自律的な調整能力を信じず、国家が経済のあらゆる側面に介入（Intervention）することでのみ、民衆を貧困から救済できると確信していました。しか

し、この設計主義的なアプローチは、当時の官僚機構の能力（State Capacity）を遥かに超えており、結果として社会に未曾有の混乱をもたらすことになります。

## 1.2 「王田制」：土地国有化による私的所有権の否定

王莽が断行した最も象徴的かつ破壊的な政策が「王田制（Wangtian System）」です<sup>1</sup>。

### 1.2.1 政策の構造と意図

王田制は、全土の土地を「王田（皇帝の土地）」と改称し、事実上の国有化を宣言するものでした。これにより、土地の自由な売買（私的所有権の行使）は法律で禁止されました。王莽の意図は、豪族による土地の兼併（買収による集中）を阻止し、古代の「井田制（Well-field system）」にならって、土地を持たない農民に再分配することにあります<sup>3</sup>。

政策項目	内容	SoE/権利の観点からの分析
土地所有権の変更	全土地を「王田」とし、私有を禁止	<b>財産権の侵害:</b> 私的財産を国家が接收する究極のSoE化。個人の権利よりも国家の理想（Rights Bias toward State）を優先。
売買の禁止	土地および奴隷（私属）の売買を禁止	<b>市場の否定:</b> 土地市場・労働市場への国家の完全介入。流動性を凍結し、経済活動を停滞させた。
再分配メカニズム	一定面積以上の土地を持つ者に分与を強制	<b>強制的な資産移転:</b> 既得権益層（豪族）からの強制的な富の移転。執行能力の欠如により現場で腐敗化。

### 1.2.2 権利の偏重と反発

この政策において、「権利の偏重」は明確に「国家（皇帝）」側にありました。個人の財産権は、国家の道徳的目標の前には無価値とされたのです。これは、当時の経済エリートであった豪族層の激しい反発を招きました。彼らにとって、土地は先祖伝来の正当な資産であり、それを一方的に没収・再分配することは、生存権への侵害と同義でした<sup>1</sup>。

さらに深刻だったのは、この政策が農民にとっても救済とならなかった点です。官僚機構の末端における腐敗（Principal-Agent Problem）により、再分配されるべき土地は役人が着服するか、あるいは耕作実態のない荒れ地が割り当てられるなど、制度は機能不全に陥りました。

### 1.3 「六筭（Six Controls）」：国家独占資本主義の実験

土地政策と並行して、王莽は「六筭（りくかん）」あるいは「六管」と呼ばれる包括的な経済統制政策を導入しました<sup>3</sup>。これは、主要産業をSoE（国営企業）化し、利益を国家が独占するシステムでした。

1. **塩・鉄・酒の専売**: これらは前漢の武帝期にも行われましたが、王莽はさらに徹底しました。生活必需品と嗜好品の生産・流通を国家が独占し、価格決定権を握ることで、莫大な利益を財政に還流させようとした<sup>2</sup>。
2. **名山大沢の国有化**: 森林や湖沼などの資源地帯を国有化し、そこで狩猟や漁労を行う者に対して所得税（貢納）を課しました。これは、自然権としての入会権（Common Rights）を否定し、自然資源を国家のSoE資産として囲い込む政策でした。
3. **五均（Five Equalizations）と六筭（Credit Control）**: 主要都市に「五均官」という国営の市場管理機関を設置し、物価の統制を行いました。また、国営の貸付制度（賒貸）を設け、民間の高利貸しを排除しようとした。

#### 1.3.1 理念と現実の乖離

これらは現代の混合経済における「公的介入」や「政策金融公庫」の発想に近いものですが、致命的だったのは、これらを運用する「実務家」として、富裕な商人たちを登用した点です。彼らは官職という「公的権利」を利用して、市場での独占的地位を乱用しました。

五均官となった商人は、公定価格を操作して不当な利益を上げ、国営貸付は民間の高利貸しよりも過酷な取り立てを行いました。国家が「搾取から民衆を守る」はずが、国家自身が「最強の独占的搾取者」として振る舞う結果となったのです。これは、SoEにおけるガバナンスの欠如がもたらす典型的失敗例と言えます。

### 1.4 貨幣制度改革の失敗と経済的混乱

王莽の経済介入の極致は、貨幣制度への度重なる介入でした。彼は4回にわたり貨幣制度を改変し、一時期は金、銀、亀、貝、布、銅など、計28種類もの複雑な貨幣（宝貨）を流通させようとした<sup>1</sup>。

- **資産の強制収奪**: 旧漢王朝の五銖銭を廃止し、新たな貨幣への交換を強制しましたが、その交換レートは不当に設定されており、実質的な資産没収となりました。
- **信用の崩壊**: 通貨発行権という「国家の特権（Sovereign Privilege）」を濫用し、民間の富を国家財政に吸い上げようとした結果、貨幣への信認（Trust）は崩壊しました。市場は大混乱に陥り、人々は物々交換に戻らざるを得なくなりました。商業活動は停滞し、都市部の経済機能は麻痺しました。

### 1.5 赤眉・緑林の乱の勃発メカニズム

王莽の改革は、意図とは裏腹に全階層を敵に回しました。豪族は財産権を侵害され、農民は経済混乱と重税、そして「何も生産していないのに税を取る（スロース税）」のような過酷な法適用に苦しみました<sup>1</sup>。そこに決定的なトリガーとなったのが自然災害です。

#### 1.5.1 自然災害と生存権の危機：プロレタリアの反乱

紀元11年頃、黄河が堤防を決壊させ、流路が大きく変わる大洪水が発生しました<sup>1</sup>。山東省や江蘇省北部の広大な農地が水没し、飢饉が発生しました。

本来、国家（SoE）はこうした災害時に備蓄を放出し、民衆を救済する機能（五均六筭の建前）を持つはずでした。しかし、王莽の複雑怪奇なシステムは機能せず、行政は麻痺していました。

土地を失い、生活基盤を破壊された農民たちは、ローマ史における「プロレタリア（Proletarii）」と同様に、「失うものが何もない（Nothing to lose）」状態に追い込まれました<sup>6</sup>。彼らにとって、反乱は政治的な主張ではなく、純粋な「生存戦略（Survival）」でした。「座して死ぬよりは、奪って生き延びる」という極限状況が、赤眉（Red Eyebrows）という巨大な集団を生み出しました<sup>5</sup>。彼らが眉を赤く染めたのは、敵味方を識別するためだけでなく、既存の人間社会（国家秩序）からの離脱と、悪鬼のような力による生存への渴望を象徴していました<sup>8</sup>。

### 1.5.2 豪族・知識人の離反と「緑林軍」の性格

一方、南陽などの地域では、劉氏の宗室（漢王室の末裔）や豪族たちが挙兵しました（緑林軍）<sup>3</sup>。

彼らの動機は、赤眉軍のような純粋な飢餓暴動とは異なり、「奪われた権利の回復」でした。王莽によって奪われた土地所有権、身分特権、そして漢王朝という正統性の回復を目指しました。

緑林軍が王莽の正規軍（公称100万、実数40万超）を昆陽の戦い（Battle of Kunyang）で撃破できたのは、彼らが単なる農民反乱ではなく、軍事訓練を受けた私兵を持つ豪族層の支援を受けていたからです<sup>9</sup>。これは、「国家による過剰介入（SoE化）」に対して、「私的権利（豪族・市場）」が反撃し、国家を打倒した事例と言えます。

---

## 第2部：後漢末期における「国家機能の私物化」と公共性の放棄

光武帝（劉秀）によって再建された後漢王朝は、王莽の過剰介入への反動から、豪族連合政権としての性格を強く持っていました。しかし、その末期（2世紀後半）には、全く異なる病理が進行していました。それは国家の過剰介入ではなく、\*\*国家機能の完全な私物化と放棄（Privatization of State Functions）\*\*です。

### 2.1 売官制度：国家権力の切り売りと収奪の連鎖

後漢末期の霊帝（在位 168年 - 189年）の時代、国家の腐敗は極に達しました。その象徴が「売官（Selling of Offices）」制度の公然化です<sup>10</sup>。

#### 2.1.1 西邸における取引の実態

霊帝は宮殿内の「西邸（Western Mansion）」に売官の専門窓口を設け、三公九卿といった中央の最高位から、地方の太守・県令に至るまで、すべての官職に値札をつけて販売しました<sup>12</sup>。

- **価格設定のメカニズム:** 地方長官である太守の職は数千万銭～数億銭で取引されました。官職に就く前の「資産査定」が行われ、支払えない者は任命を辞退するか、自殺に追い込まれる（例：司馬直）ケースもありました<sup>10</sup>。
- SoEの観点からの分析（民営化の悪用）：  
官職とは本来、公共サービス（治安、司法、インフラ管理）を提供する「公的機能（Public Office）」です。しかし、ここでは官職が「将来の収益を生む投資物件（Investment Asset）」として扱われました。これは、国家機能の「最悪の形での民営化」と言えます。

## 2.1.2 投資回収としての略奪

大金を払って官職を買った者は、任期中に投資を回収（ROI: Return on Investment）し、さらに利益を上げる必要があります。そのため、彼らは赴任地で民衆から過酷な収奪を行いました<sup>10</sup>。

「3000万銭で買った太守の地位」の元を取るためには、行政能力（Merit）よりも収奪能力が必要とされました。これにより、地方行政は民衆から富を吸い上げるための巨大な「営利企業（Private Enterprise）」へと変質し、公共性は完全に消滅しました。

## 2.2 宦官の専横と「特権（Privilege）」の構造

この売官システムの中心にいたのが、皇帝の側近である宦官たち、特に「十常侍（Ten Attendants）」と呼ばれるグループでした<sup>13</sup>。

### 2.2.1 インフォーマル・グループによる国家の乗っ取り

宦官は本来、家内奴隸的な存在であり、公式な官僚機構（外朝）の序列には含まれない存在でした。しかし、皇帝との物理的・心理的な近さを利用して情報の遮断を行い、事実上の最高権力者として君臨しました。霊帝は「張譲（宦官のリーダー）は我が父、趙忠は我が母」と公言するほど彼らに依存しました<sup>14</sup>。

### 2.2.2 権利の偏重：法を超越する「特権」

ここで重要なのは、「権利（Rights）」と「特権（Privilege）」の違いです。

- **権利:** 法に基づいて万人に（あるいは特定の階級に）等しく保障されるもの。
- **特権:** 法の適用を免除される、あるいは法を超越して利益を享受する特別な地位。

十常侍とその一族は、殺人や横領を行っても司法の手が及ばない「特権」を享受しました。彼らは国家事業（宮殿の修復など）を口実に増税（畝税）を行い、集めた資材を横領して私腹を肥やしました<sup>10</sup>。彼らは自らの屋敷を宮殿のように飾り立てる一方、国家の財政は破綻に瀕しました。これは、国家という「公器」が、特定のインフォーマル・グループによって私物化（Privatized by Elite Capture）された状態です。

## 2.3 土地兼併と「アゲル・プブリクス」の喪失

政治の腐敗と並行して進行したのが、経済構造の二極化と「ラティフンディア（大土地所有）」の拡大です。



- **小農民の没落:** 重税と自然災害、そして売官によって赴任した強欲な官僚の収奪により、自作農（自らの土地を持つ農民）は土地を手放さざるを得なくなりました。
- **流民化と隷属化:** 土地を失った農民は流民となるか、豪族の荘園（Manor）に逃げ込み、小作人（部曲、佃客）として隷属しました<sup>4</sup>。
- **ローマ史との対比:**  
このプロセスは、ローマ共和政末期において「アゲル・プブリクス（公有地）」がパトリキ（貴族）によって不法に占有され、大土地経営（ラティフンディア）が拡大した過程と酷似しています<sup>15</sup>。  
ローマでは、公有地法（リキニウス・セクスティウス法）による制限が骨抜きにされ、富裕層が事実上の私有地として独占しました。同様に後漢末でも、本来は課税対象であるべき土地と人民が、豪族の私有財産として囲い込まれました。これにより、国家の課税ベースは浸食され、残されたわずかな自作農にさらに重い税がのしかかるという悪循環（fiscal crisis）に陥りました。

## 2.4 黄巾の乱の勃発メカニズム

### 2.4.1 宗教結社「太平道」による公共機能の代替

国家が救済機能を放棄し、収奪機関と化した真空地帯を埋めたのが、張角（Zhang Jue）率いる「太平道（Taiping Dao）」でした<sup>13</sup>。

- **福祉の提供:** 張角は、疫病に苦しむ人々に「符水（呪術的な治療水）」を与え、罪を告白させることで精神的な救済を行いました<sup>19</sup>。国家が見捨てた医療・福祉・相互扶助の機能を、宗教結社が代替（Substitute）したのです。
- **パラレル・ステートの構築:** 彼は信者を「方」という軍事的・行政的単位に組織化しました。36の方（教区）は、崩壊した地方行政に代わる「影の政府」として機能し始めました<sup>13</sup>。

### 2.4.2 「党錮の禁」と知識人（クリアリングハウス）の排除

黄巾の乱の深刻さを決定づけたのは、「党錮の禁（Disasters of Partisan Prohibitions）」によって、本来なら体制の維持者となるべき知識人層（エリート）が排除されていたことです<sup>20</sup>。

宦官に対抗しようとした清流派の官僚や知識人（党人）は、投獄されるか、公民権を剥奪（禁錮）され、政治から排除されました。これにより、国家の自浄作用（腐敗を正す機能）は完全に失われました。また、地方で信望を集める知識人層が国家から疎外されたことで、彼らの一部は国家に協力せず、自衛のための武装（後の軍閥化）を始めました。

黄巾の乱が勃発した際、霊帝は慌てて党錮を解除しましたが<sup>20</sup>、時すでに遅く、国家と知識人層の間の信頼関係（Social Contract）は修復不可能なほど破壊されていました。

---

## 第3部：「権利の偏重」と「SoE」の観点からの比較分析

以上の分析に基づき、赤眉・緑林の乱と黄巾の乱の原因における構造的な違いを、「権利の偏

重」と「SoE」のフレームワークを用いて比較整理します。

### 3.1 権利の偏重（Rights Bias）の構造比較

比較軸	新朝（赤眉・緑林の乱）	後漢末（黄巾の乱）
偏重の所在	国家（Sovereign）への偏重	特権階級（Privileged Elite）への偏重
権利侵害の性質	制度的・一律的侵害  「王田制」など法に基づき、全階層（豪族・農民）の私的所有権を否定。	恣意的・選択的侵害  法の支配が崩壊し、賄賂やコネを持たない者（貧民・清流派）の権利のみが剥奪される。
対立構造	国家 vs 全社会  皇帝の理想主義が、全階層の生存権と財産権を脅かした。	インサイダー vs アウトサイダー  宦官・売官官僚（特権層）が、それ以外（党人・農民）を搾取。
ローマ史的並行	グラックス兄弟の改革（の過激版）  国家権力による強引な再分配と既得権益の打破。	共和政末期の腐敗  元老院・騎士階級による公有地の私物化と司法の形骸化。

新朝においては、国家こそが最大の権利侵害者でした。王莽は「公益」の名の下に、私的権利を徹底的に制限しました。これに対し、後漢末期では、国家は「抜け殻」となり、その内部に巣食うインフォーマル・グループ（宦官）が法を超越した特権を振るいました。新朝の民衆は「国家という巨悪」と戦い、後漢末の民衆は「国家の不在とカオス」の中で自衛のために立ち上がったのです。

### 3.2 SoE（国家介入）と経済システムの比較

比較軸	新朝（過剰介入モデル）	後漢末（民営化・放棄モデル）
SoEの形態	国家独占資本主義	官職の商品化（State as Commodity）

	塩・鉄・酒・金融・土地のすべてを国営化・管理下に置く。	国家機構そのものを切り売りし、公共財を私的収益源に変える。
市場への態度	<b>抑圧と統制</b>  自由市場を否定し、五均官による価格統制を強行。	<b>歪曲と放置</b>  売官による参入障壁（賄賂）と、豪族による市場独占を放置。
経済的帰結	<b>スタグフレーションと混乱</b>  貨幣制度の崩壊と流通の麻痺。生産活動の停滞。	<b>極度の格差とインフラ崩壊</b>  富の偏在と、治水などの公共投資の放棄による災害被害の拡大。
失敗の本質	<b>State Capacityの欠如</b>  理想的な計画を実行する実務能力がなく、現場が腐敗した。	<b>Public Interestの喪失</b>  国家が公共性を捨て、私利追求機関（Predatory State）と化した。

新朝の失敗は、「国家が市場を代替できる」という過信（High Modernism）によるものでした。一方、後漢末の失敗は、国家が本来果たすべき「公正な審判者」としての役割を放棄し、市場の論理（金銭による売買）を統治機構の核心（人事権）にまで導入してしまったことにあります。

### 3.3 外部ショックと「失うもののない人々」の役割

両方の乱において、最終的な引き金となったのは自然災害（新朝の黄河決壊、後漢末の疫病と飢饉）でした。しかし、その災害が反乱に結びつくプロセスには、社会構造の違いが影響しています。

- 新朝（赤眉）：  
国家の過剰な介入（スロース税など）により、農民は災害前から疲弊していました。災害は、彼らを「プロレタリア（Proletarii）」から「盗賊（Bandits）」へと変える最後の一押しでした。彼らにはイデオロギーはなく、純粋な生存本能（Hunger）が原動力でした。
- 後漢末（黄巾）：  
国家機能の不在により、災害に対するセーフティネットが皆無でした。そこに「太平道」という宗教的イデオロギーが入り込みました。黄巾の乱の参加者は、単に飢えているだけでなく、「蒼天（漢）」に代わる「黄天」という新しい秩序（New World Order）を夢見る「信徒」でした。彼らは、腐敗した現世をリセットするための「神の兵士」として組織化されたのです。これは、ローマにおけるスパルタクスの乱のような奴隷反乱とは異なる



り、千年王国運動（Millenarianism）の側面を強く持っていました。

---

## 結論：統治の正統性と「公共」の再生

本レポートの分析から、王莽の後の赤眉・緑林の乱と、後漢末期の黄巾の乱は、統治システムが対極にある二つの限界点を越えた時に発生したことが明らかになりました。

### 1. 赤眉・緑林の乱（新朝）：

「過剰な国家（Big State）」の破綻。

国家が個人の権利を侵害し、経済を過度にコントロールしようとした結果、社会の自律性を破壊し、反発を招きました。これは「設計主義的過信」による失敗であり、SoEの無秩序な拡大が経済の血管（市場）を詰まらせた事例です。

### 2. 黄巾の乱（後漢末）：

「不在の国家（Failed State）」の破綻。

国家が公共性を放棄し、特権階級による私物化を許した結果、弱肉強食のアナーキー状態を招きました。これは「腐敗とネグレクト」による失敗であり、売官と特権によって国家の骨格が溶け落ちた事例です。

## 現代への示唆

この歴史的比較は、現代の国家運営においても重要な示唆を与えます。国家権力（Sovereignty）と個人の権利（Property/Liberty）のバランスが崩れた時、あるいは国家機構が特定の利益集団（Eunuchs/Interest Groups）によって捕獲（State Capture）された時、社会は「正統性」の危機に直面します。

王莽は「権利」を軽視しすぎ、霊帝は「特権」を容認しすぎました。持続可能な統治には、国家による適切な介入（SoE的機能）と、法による権利の保護（Rule of Law）、そして公正な官僚機構（Meritocracy）の維持が不可欠です。後漢末、黄巾の乱は鎮圧されましたが、漢王朝の権威は回復せず、軍閥による群雄割拠（三国志）の時代へと突入しました。これは、一度崩壊した「公共性への信頼（Social Trust）」を回復することがいかに困難であるかを示しています。

---

参考文献・資料ID参照一覧:

1

## 引用文献

1. Wang Mang - Wikipedia, 12月 18, 2025にアクセス、  
[https://en.wikipedia.org/wiki/Wang\\_Mang](https://en.wikipedia.org/wiki/Wang_Mang)
2. Han Dynasty Part II - Reformist Usurper (9 – 23 CE) - Pandaist, 12月 18, 2025にアクセス、  
<https://pandaist.com/blog/en/chinese-dynasty-han-dynasty-part-ii-reformist-usur>

3. 阿倍仲麻呂 - 漢詩鑑賞会A, 12月 18, 2025にアクセス、  
<http://kansi.xsrv.jp/toshikansho20200124/hito.htm>
4. The Red Eyebrows 赤眉 and the Lulin 綠林 uprising (www.chinaknowledge.de), 12月 18, 2025にアクセス、  
<http://www.chinaknowledge.de/History/Terms/chimei.html>
5. Red Eyebrows - Wikipedia, 12月 18, 2025にアクセス、  
[https://en.wikipedia.org/wiki/Red\\_Eyebrows](https://en.wikipedia.org/wiki/Red_Eyebrows)
6. L'Enfant Peuple: Rimbaud, Vallès, Literary Politics, and the Legacy of the Commune ò - University Digital Conservancy, 12月 18, 2025にアクセス、  
<https://conservancy.umn.edu/bitstreams/7ff6dd98-892e-45db-9ae8-66c6ca61a32e/download>
7. UNIVERSITY OF CAPE COAST POLITICS IN THE ROME OF CICERO'S DAY BY EMMANUEL TEIKO Thesis submitted to the Department of Classics, 12月 18, 2025にアクセス、  
<https://ir.ucc.edu.gh/xmlui/bitstream/handle/123456789/6145/EMMA%27S%20FINAL%20THESIS.pdf?sequence=1&isAllowed=y>
8. Red Eyebrows | Militia, Rebellion & Uprising - Britannica, 12月 18, 2025にアクセス、  
<https://www.britannica.com/topic/Red-Eyebrows>
9. Battle of Kunyang - Wikipedia, 12月 18, 2025にアクセス、  
[https://en.wikipedia.org/wiki/Battle\\_of\\_Kunyang](https://en.wikipedia.org/wiki/Battle_of_Kunyang)
10. Emperor Ling of Han - Wikipedia, 12月 18, 2025にアクセス、  
[https://en.wikipedia.org/wiki/Emperor\\_Ling\\_of\\_Han](https://en.wikipedia.org/wiki/Emperor_Ling_of_Han)
11. APPENDIX F Plays, Scenes, and Drama Collections, 12月 18, 2025にアクセス、  
[https://resolve.cambridge.org/core/services/aop-cambridge-core/content/view/8345979A63012449FD8D3F540E93CA74/9781785278082apx6\\_p381-390\\_CBO.pdf/plays\\_scenes\\_and\\_drama\\_collections.pdf](https://resolve.cambridge.org/core/services/aop-cambridge-core/content/view/8345979A63012449FD8D3F540E93CA74/9781785278082apx6_p381-390_CBO.pdf/plays_scenes_and_drama_collections.pdf)
12. The Marquise Is Innocent - Part - 2 | PDF | Poetry - Scribd, 12月 18, 2025にアクセス、  
<https://www.scribd.com/document/718499414/The-marquise-is-innocent-part-2>
13. Yellow Turban Rebellion - Total War Wiki | Fandom, 12月 18, 2025にアクセス、  
[https://totalwar.fandom.com/wiki/Yellow\\_Turban\\_Rebellion](https://totalwar.fandom.com/wiki/Yellow_Turban_Rebellion)
14. Ten Attendants - Wikipedia, 12月 18, 2025にアクセス、  
[https://en.wikipedia.org/wiki/Ten\\_Attendants](https://en.wikipedia.org/wiki/Ten_Attendants)
15. The Lost Science of Money: The Mythology of Money - the Story of Power [1 ed.] 1930748035 - DOKUMEN.PUB, 12月 18, 2025にアクセス、  
<https://dokumen.pub/the-lost-science-of-money-the-mythology-of-money-the-story-of-power-1nbsped-1930748035.html>
16. Gift and Gain: How Money Transformed Ancient Rome [1 ed.] 0190496436, 9780190496432, 12月 18, 2025にアクセス、  
<https://dokumen.pub/gift-and-gain-how-money-transformed-ancient-rome-1nbsped-0190496436-9780190496432.html>
17. Ager publicus - Wikipedia, 12月 18, 2025にアクセス、  
[https://en.wikipedia.org/wiki/Ager\\_publicus](https://en.wikipedia.org/wiki/Ager_publicus)
18. Three Kingdoms Revisited | PDF | Three Kingdoms | Han Dynasty - Scribd, 12月 18, 2025にアクセス、

- <https://www.scribd.com/document/294496880/Three-Kingdoms-Revisited>
19. Ningyōgeki Sangokushi 1: The Oath of the Peach Garden - Nishikata Film Review, 12月 18, 2025にアクセス、  
<https://www.nishikata-eiga.com/2013/12/ningyogeki-sangokushi-1-oath-of-peach.html>
  20. He Yong (Han dynasty) - Wikipedia, 12月 18, 2025にアクセス、  
[https://en.wikipedia.org/wiki/He\\_Yong\\_\(Han\\_dynasty\)](https://en.wikipedia.org/wiki/He_Yong_(Han_dynasty))
  21. Disasters of the Partisan Prohibitions - Wikipedia, 12月 18, 2025にアクセス、  
[https://en.wikipedia.org/wiki/Disasters\\_of\\_Partisan\\_Prohibitions](https://en.wikipedia.org/wiki/Disasters_of_Partisan_Prohibitions)
  22. The Eastern Han Period | Early World Civilizations - Lumen Learning, 12月 18, 2025にアクセス、  
<https://courses.lumenlearning.com/atd-herkimer-worldcivilization/chapter/the-eastern-han-period/>
  23. Wang Mang | Research Starters - EBSCO, 12月 18, 2025にアクセス、  
<https://www.ebsco.com/research-starters/history/wang-mang>